

多様な人たちとの幸せな経験をつないで今がある—社会福祉士、公衆衛生修士の視点から  
グローバルヘルスの世界で歩み始める上級研究員

みやぎ  
**宮城**

あゆみ  
**あゆみ**

国際医療協力局  
人材開発部・研修課  
上級研究員



**★略 歴**

2005年	龍谷大学国際文化学部国際文化学科卒業
2002-2003年	フランスSUFLE-IEFEE, L'Université d'Aix Marseille留学
2006-2013年	社会福祉法人子羊学園重症障害児・者施設つばさ静岡
2011年	日本福祉大学通信教育部福祉経営学部医療・福祉マネジメント学科卒業 (社会福祉士取得)
2015-2020年	一般財団法人日本国際協力センター
2020年-現在	国立健康危機管理研究機構国際医療協力局
2024年	長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科博士前期課程 国際健康開発コース終了(公衆衛生修士号取得)
2025年-	JICA医療サービスの質改善プロジェクト長期専門家/業務調整として セネガルに赴任中

**★これまでの主な担当業務**

厚生労働省受託事業「国際展開推進事業」：ベトナム脳卒中、ベトナムME、コンゴ民看護  
JIHSグローバルヘルス ベーシックコース、アドバンストコース  
JIHSグローバルヘルス フィールドトレーニング：ベトナム  
JICA課題別研修：「アフリカ仏語圏地域 女性と子どもの健康改善」  
東京オリンピック・パラリンピック：選手村診療受付・感染症対策

**★現在の業務**

セネガル共和国 JICA医療サービスの質改善プロジェクト長期専門家/業務調整

## 宮城さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えてください。

最初から強い使命感を持って国際協力を志していたわけではありませんでした。私の名前「あゆみ」は、丸みのある文字の形と「何にでも歩むように」という願いを込めて名付けられたそうです。その名前のとおり、のびのびと幸せなこども時代を過ごしました。

高校卒業後は京都の大学に進学し、国際学を専攻しました。当初から明確な将来像があったわけではなく、世界の地理や文化に関心があり、将来の選択肢を広く残せる分野を選んだというのが正直なところでした。京都で暮らしたくて志望した大学でしたが、実際のキャンパスは滋賀にありました（笑）。それでも週末ごとにバイクで京都に通い、後半は念願かなって京都市内に引っ越し、充実した学生生活を送りました。

もともと60年代のフランス映画や音楽が好きだったことや、高校時代に「英語はこれ以上やっても伸びないかな」と感じたこともあり、大学ではフランス語を選択しました。1年生の夏休みに短期留学で初めてフランスを訪れ、その後1年間の長期留学も経験しました。20歳で世界各国の友人たちと出会い、多様な価値観に触れたことは、今の自分の核になっていると感じています。

留学中はヨーロッパ各地に足を運びましたが、バックパッカーのようなスタイルよりも、フランスを拠点にして少しずつ出かけるスタイルが自分には合っていました。観光名所をめぐるより、地元の人とカフェで過ごしたり、マーケットや本屋を回ったりと、ひとつの街にじっくり滞在することが好きでした。当時はフランスやヨーロッパの文化に強く惹かれていて、まさか将来アジアやアフリカの国々に関わることになることは、想像もしていませんでした。

## 国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたのですか。

大学卒業後は、在学中に取得したオランダのフラワーアレンジメント資格を活かして花の業界に入りました。しかし、働き方や美的感覚をお金に換えることに違和感を覚え、早い段階で転職を決意しました。ハローワークで福祉の仕事を勧められ、ヘルパー資格を取得して重症心身障害児者施設で働き始めました。

きっかけは「取り残されがちな人を助けたい」という高尚な理由ではなく、そうした人たちをただ見ているだけで何もしない人にはなりたくないという、シンプルな動機だったと思います。実際は、働くというより、一緒に遊んで楽しむ感覚に近く、そこで出会った方々との経験はいまでも私の宝物です。

現場では体力を要する業務が多く、当時は健康にも自信がりましたが、長く続けるには限界があると感じました。そこで、福祉の分野で体力に依存しない職種を目指し、働きながら通信制大学で学び、社会福祉士の資格を取得しました。

一方で、日本で働きながらも、もう一度フランスに行きたいという思いがありました。そこで、ラストチャンス年齢である30歳のときに、ワーキングホリデーに応募しました。ただ、その時はフランスよりもイギリスに惹かれていたので、イギリスを選びました。多様な人が暮らすロンドンに拠点を置き、子どものお世話をする「ナニー」として働きながら、ヨーロッパ各地を自由に回っていました。「ここで暮らしたらどんな感じなんだろう」と想像しながら、現地の人たちの様子を観察するのが好きでした。今思えば人類的な視点に近かったのかもかもしれません。

帰国後は、ロンドンでの経験からより多様な人と関わる仕事を求めて、日本国際協力センター（JICE）に入りました。最初に担当したのは、外国にルーツを持つ人たちの就労支援を目的とした日本語研修事業です。群馬県大泉町などの外国人集住地域で、自治体やハローワーク、地域の方たちと連携しながら研修を企画・運営しました。異なる文化を持つスタッフの方たちと働く日々はとても楽しい経験でした。その後、国際協力機構（JICA）のインド鉄道省職員向けの研修に携わり、年間300人規模の研修員を受け入れる大規模事業を担当しました。文化の違いに圧倒されながらも、多様な関係者と協働する研修業務の基礎を学びました。この年はいつもインドの土埃とカレーの匂いに包まれていたように思います。

続いて、国立国際医療研究センター（NCGM・現JIHS）が実施する研修で、医療従事者向け訪日研修のロジスティクスを2年間にわたり担当しました。この期間、国際医療協力局に常駐したことが、グローバルヘルスに関わる大きなきっかけとなりました。



重症心身障害児者施設の夏まつり



外国人就労定着研修：思い出深いクラスの修了式の後、多国籍な研修員と新宿御苑でお花見



JICAインド鉄道省研修：唯一の女性研修員と、多忙な日々を駆け抜けた同僚と記念撮影

### 国際医療協力局に入局したきっかけ、理由を教えてください。

JICEでの任期が終わるのを機に、当時の協力局研修課にお声がけいただいたのが入局のきっかけです。研修の仕事が好きだったこと、また局内の雰囲気もとても良かったことが決め手でした。さらに、同じフロアで2年間働く中で、協力局が積極的に勉強会やセミナーを開催していることを知っていたので、そのような学びの場に参加できる環境になったこともうれしかったです。また、局員として初めて出張に同行し、同じ目標に向かって働いてきた現地スタッフとようやく対面できたときは、感慨深かったです。

また、ちょうどその頃に大学院進学も考えており、医療職以外にも門戸を開いていた長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科（TMGH）で学ぶことにしました。NCGM内にはTMGHの東京サテライトがあり、テスト前には同僚でTMGH修了生の先輩に「傾向と対策」を教えてもらったり、協力局の皆さんには単位の進捗を気にかけてもらったり、修士論文作成の相談に乗ってもらったり、本当にたくさん支えてもらいました。

修論提出前には休暇もとらせてもらい、2年半かけてようやく修了できました。修論はそれまでの人生の中で一番がんばった経験だと感じますが、職場のサポートなくしてはゴールにたどり着けませんでした。こんなに応援してもらえる職場は他にないと思います。また、精神的にも支えてくれた指導教官や、社会人コースで出会った同期は今もかけがえのない一生の友人です。

修士論文では、セックスワーカーと公的保健サービスの間にある障壁をテーマに、質的研究を行いました。国内でセックスワーカーを支援するNPO団体で週末インターンをしていたご縁から、その団体と交流のある風俗店で働く方たちの質的調査をさせていただきました。セックスワーカーも「取り残されがちな人」と見なされることがありますが、実際はとても逞しい方たちが多くて、私のほうがパワーをもらいました。

私自身、比較的にリベラルな環境で育ち、母や親類に女性管理職もいたことから、ジェンダー（特に女性）に関する差別や偏見があることに疑問を抱いていました。そのため大学院進学を考えた大きな理由も「ジェンダーを学びたい」という思いでした。実はTMGH一択ではなく、ジェンダー学を専門に学べる大学院も受験しましたが不合格となり、結果としてTMGHを選ぶことになりました。もしそちらに進んでいたら、今とはまた違った道を歩んでいたかもしれません。



JICA課題別研修：修了式で女性研修員たちとお土産の冠をつけて笑顔と達成感（疲労感も）があふれるひととき



TMGH修了式：心に残る修了の瞬間と、支えてもらった仲間と囲まれて号泣



フィールドトレーニング（ベトナム）：現地通訳、局員、参加者と、フィールドとなった小さな町で朝ラン

## ——— 今後はどのような夢や展望をお持ちですか。

これまでも、そして今も「大きな夢」を持っているわけではありません。振り返ってみると、自分から積極的に道を切り開いたというより、やりたいことを続けながら、選択肢が狭まらない人生を歩んできたように思います。ただ、障害者施設では医療的ケアを必要とする子どもさんたちの部署に配属されたり、国際協力の仕事でも保健医療分野に関わることが多かったり、大学院もジェンダー学部ではなくTMGHに進学したりと、保健医療分野とは自然に縁が繋がってきたと感じています。社会福祉士は「医療職」には分類されないかもしれませんが、もし病院で働いていたらある種のヒエラルキーを意識したかもしれません。自分自身は職種を意識することはあまりなく、「人と一緒に働くこと」をいつも大切にしています。

2025年7月からセネガルに長期赴任しています。このような機会を想像していなかったのも、とてもありがたく感じています。「医療サービスの質改善」プロジェクトで、質改善の専門家と業務調整を担当しています。毎日が勉強で、プロジェクトメンバーや在京の同僚や友人にたくさん助けをもらいながら、一歩ずつ進めています。進んだ分だけ後退することも多々ありますが、赴任から半年が経ち、ようやく全体像が見えてきました。

また、セネガルでの生活も、日常になってきました。現地の友人やお気に入りのカフェができ、ランチタイムや移動の車内でローカルスタッフと過ごす時間が楽しく、学びにもなっています。赴任前はサーフィンに挑戦したいと思っていましたが、今は毎週土曜日の朝にインド人の先生にヨガを習って、まずは体幹を鍛えています。この2年間で、仕事も生活も次につながるように歩んでいきたいと思っています。

最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

「スティーブ・ジョブズの「点と点をつなぐ」スピーチや、ジョン・クランボルトの「計画的偶発性理論」は、私のキャリアの中で支えになってきました。グローバルヘルスの分野は、最初から明確に目指していたらもちろん素晴らしいですが、私のように偶然の流れからたどり着いたとしても、受け入れてくれる懐の深いフィールドだと思います。年齢、性別、国籍を超えて、多様な人たちとつながることができるのも大きな魅力です。

まずは一歩踏み出してみて、違うと思ったらやめてもよいのではないのでしょうか。勉強は何歳からでも大丈夫です。こうした考え方は、元協力局員の方たちとの出会いの中で教わり、大切にしてきたものです。私自身もまだグローバルヘルスの学びの途中にありますが、一緒に学び、一緒に活動できる仲間と出会えたらうれしく思います。

ありがとうございました。



保健省内のレストラン：ナショナルスタッフやカウンターパートと過ごすお気に入りの場所。達筆すぎて読めないメニューも、食後に飲む現地のお茶も、壁に書いてあるフレーズ「Resto santé "notre suivi, votre santé"（“私たちのサポート、あなたの健康”）も大好き



赤ちゃんの命名式：セネガルのナショナルスタッフと幸せな時間を共有